



中央大学法学部寄附講座
『福祉と雇用のまちづくり』

第3回（公開第2回）
「ごちゃまぜ」な
コミュニティが拓く新たな時代

2017年4月26日

社会福祉法人佛子園理事長

雄谷 良成 氏

社会福祉法人佛子園理事長のほか、青年海外協力隊の会理事長、お寺の住職など多面的で活躍。
地域において、新しい雇用、福祉、まちづくりを一体化していく取組みを推進。

「ごちゃまぜ」という言葉、自分たちのまわりに、自分の生まれ育った場所でもよいですが、そこに若い人も高齢者も障がいのある人も病気の人も、みんなが日常的に集って関わるような場所があるかどうかということをイメージしながら話を聞いていただきたいと思います。

エイジフレンドリーシティという、2007年にWHOが公表した「高齢者にやさしいまちづくり」の要素（住居、社会参加、尊厳と社会的包摂、市民参加と雇用、コミュニケーションと情報、地域支援と保健サービス、屋外スペースと建物、交通機関）について、よく考えてみたら、福祉とか医療とかというものは、「住居」及び「地域支援と保健サービス」くらいしかカバーしていない。移動したり、いろいろな情報をもらったり、人から受け入れられたり、働いたり、そんなことがいろいろな形で組み合わさって人の幸せとか、暮らしは成り立っている。それなのに、福祉とか医療というのは「私たちに預けてくれれば大丈夫です」みたいなおごりがあった、ということに私たちは気づきました。

西園寺（小松市野田町の55世帯からなる集落にある佛子園の施設）で、高齢者とか障がい者とか子供とか、野田町の住民とか、みんなが関わり合って過ごしていく。そうすると、2008年から2017年までに、55世帯から75世帯に増えました。20世帯、約4割増です。西園寺のある小松市は、人口11万人弱、人口減少、高齢化が進んでいる場所です。実を言うと、このような化学反応が起こるなんて、私たちは思ってもいませんでした。増加した20世帯に、なぜこの場所を選んだのか、理由を聞きました。障がい者、高齢者、認知症の人、いろんな人がここに集っている、その居心地のよさで選んだと言うのです。おかしくないですか。障がいのある人は障がい者施設へ、認知症が進んだら特別養護老人ホームへ、そういう縦割りがよかったのではないですか。ところが、そういった垣根をぶっ壊したら人が集まり出した。居心地がよいと言いだした。このことが、なんとなく、私たちの「ごちゃまぜ」の始まりだったと思います。

私たちの本部施設は、グループホームとか、サービス付高齢者住宅とか、学生の住む場所を点在させているモデルです。一般の人たちが普通に施設の間に住んでいるわけですから、ひとつの町です。これをどうやって運営していくのか。あの小さい西園寺のモデルの中に何か解決のキーがあるのではないか。実を言うと、今までの施設の運用とは大きく違っています。住民の人たちが参加をするような形で、みなさんと相談しながらやってきました。地域はもうターニングポイントを迎えています。専門家が専門家だけでやっている時代ではありません。地元の人が参加をする。参加をするということが、

多分、今後のキーワードになっていく。時代は参加する社会へ変わっていくと思います。

「ごちゃまぜ」というのはソーシャル・インクルージョン、「共生」だとちょっとかたい気がします。ごちゃまぜで日々ある。私たちの本部施設は、今、1日1,000人、月3万人、年間36万人の利用があります。本部のある白山市は人口11万人です。病気の人もそうでない人も、障がいのある人もそうでない人も、日本人も外国人もみんな一緒になったら何か先が見えてきた。「ごちゃまぜ」の反対語はソーシャル・エクスクルージョン、社会的排除という言葉になります。最初に申し上げましたが、自分たちのまわりに、自分の生まれた地域に「ごちゃまぜ」の場所があるのでしょうか。今、資本経済で失われた地域の力をもう一度見直す、そんな時期に来ているとしたら反対におもしろい時期だと私たちは思っています。

【一問一答】 雄：雄谷氏 宮：中央大学法学部教授 宮本 太郎氏

(宮) 高齢者なのか、障がい者なのか、子供なのかそれらを分けるところから始まる日本の縦割りの制度の中では、「ごちゃまぜ」はすごく難しい。どのようにして「ごちゃまぜ」が実現できたのでしょうか。

(雄) 障がいのある人がいたら応援しなきゃ、認知症の人がいたら応援しなきゃということで、そこを頑張っていったら、今のような縦割りになったのだと思います。それは一時代、保護という考え方の中ではそれでよかったけれど、時代がすごく変わってきて、価値観も大きく変わってきたと思います。「ごちゃまぜ」については、日常と非日常というのがあって、非日常の連続ではだめでした。日常的にゆるい感じでずっとごちゃまぜになっているというか、そういったことが1つのキーだと思います。何か構えたものではありません。私たちの技術は、福祉の専門性がバックボーンにあります。人を集める技術、温泉だったりとか、ビールを飲んだりとか、必要なことは教育(キョウイク)と教養(キョウヨウ)であるとか。『キョウイク』と言ったら、『今日行く場所がある』。『キョウヨウ』は『今日酔う場所がある』ということですね。「今日行く」と「今日酔う」というのは必要な場所だと思います。